



世紀末のコミュニケーション

山本 政人

世紀末などことさら強調する必要はないかに思える。別に世紀末だろうが世紀の真ん中だろうが、日々を生きている人間にとつては関係ないことのように思える。しかし歴史としての意味はある。単に区切りというだけではない。後の世に影響を及ぼすことが、今起きているはずである。ところが皮肉なことに、今起きていることは今を生きている者にはわかりにくい。

「コミュニケーションの発達」というのが私の研究テーマだが、最近よくわからなくなっ

てきた。コミュニケーション技術は携帯電話や電子メールの普及など、急速に発展・進化してきた。しかし人はそれを使ってより豊かなコミュニケーションを行っているかと言えば、決してそうではない。むしろ人と直接向かい合うより、機械に向かい、人との接触を極力避けようとする者が増えているかのようにも見える。しかしそうは見えながら、彼等はコミュニケーションをしたという強烈な欲求を内に秘めていることは間違いない。携帯電話や電子メールの急速な普及の背景には、このようなコミュニケーション欲求があったに違いない。

よく言われているように、コミュニケーションには二つの種類がある。一つは、何か目的があつて、それを達成するためのいわば手段としてのコミュニケーションであり、もう一つは、コミュニケーションそれ自身が目的のコミュニケーションである。一般にコミュニケーションと言われ、研究の対象にもなるのは前者であるが、実際に私たちが日常行っているコミュニケーションには後者も含まれているのではあるまいか。

コミュニケーション

それ自身が目的のよう
に見えて、実はほかに
目的があるのだと言う
こともできる。叙述だ



とか要求だとか、確かにコミュニケーションにはたくさんの機能があるとされている。それはそれとして、目的は機能とは次元が違うように思う。たとえば子どもは親にさまざまな要求をしてくる。「あれがほしい」「これはいやだ」「もっとほしい」。子どもは一時は満足するように見えて要求には限りがない。この場合、個々の要求を受け入れてもらうことが目的なのだろうか。実は次々と要求を出すことによつて、コミュニケーションを続けたいというのが本当のところなのではないか。子どもは「遊びが仕事」と言うが、同様に「コミュニケーションが仕事」と言つても間違いではないような気もする。

コミュニケーションには目標があつて、それに至るステップ・手段があるというシステム論的なとらえ方では、「それ自体が目的」であるコミュニケーションなど考えようもないだろう。少なくとも研究の対象にはならない。しかし今、若者や子どもが必要としてゐるのは、むしろ「それ自体が目的」のコミュニケーションなのではないだろうか。

世代間のコミュニケーションが困難になっていることは改めて強調する必要もないと思うが、コミュニケーション自体が若者や子どもの求めているものであるとすると、手軽に、都合のいいとき、好きなときにコミュニケーションできる携帯電話などは、彼らのニーズにぴつたりのツールであつたと言える。そしてコミュニケーションそのものが目的であれば、相手をしてくれる人ならば誰でもいいということにもなるのかもしれない。とは言つても、コミュニケーションを続けるうちに、次第に相手を信頼し、相手に依存する

ようになる。それがコミュニケーションというものが本来持っている特質である。

近年いろいろと生じている家族の問題は、コミュニケーションという視点からとらえ直すことができるかもしれない。今なお家族は機能とか役割といったシステム論的な枠組、システム論的呪縛にとらわれすぎなのではないか。システム論的枠組は研究の方法としてはもちろん有意義だったには違いないが、当の家族がそれにとらわれすぎてしまったことが不幸の始まりではなかったのか。

わかりやすく言うところいうことである。かつて「親子の断絶」が叫ばれ、親は子どもとの関係修復を試みた。親は「よき親」であろうとし、そうすれば子は「よい子」になると考えた。親は子の要求を聞き、それにできるだけだけ応えようとした。そこで行われたのは、お互いがお互いの目的を知り、それに対して何かを与えるというコミュニケーションだった。つまりはギブ・アンド・テイクである。コミュニケーションというのは、形としては結局ギブ・アンド・テイクであるが、ギブ・アンド・テイクだけが目的であるとは限らない。ギブ・アンド・テイクは「それ自体が目的」のコミュニケーションと裏表の関係にある。



しかし自分自身のことを考えてみても、「それ自体が目的」のコミュニケーションなど最近したおぼえがない。たとえばどういふものかと言うと、小津安二郎の映画でよく出てくる（実は小津の映画なんてほとんど見たことはないが）親子が並んで遠くを見ながら意味もないことを話しているといった事態である。ああいうことは実際したことがないし、映画で見てもいらいらするほどである。しかし家族にしても友人にしても、ギブ・アンド・テイクのコミュニケーションしかしなくなったら、その関係はいずれ破綻をきたすのではあるまいか。

柄にもなく変な理屈をこねてしまったが、世界は複雑化の一途をたどっている。今やコミュニケーションはその最たるものの一つである。情報の氾濫が複雑化の原因かと思っていたが、それだけではなさそうである。人も確実に変わっている。しかしどう変わっているのかがまだわからないのである。

ここで突然、アニメの話になる。『機動戦士ガンダム』で「ニュータイプ」という概念が出てきた。新しい人類という意味である。主人公のアムロやライバルのシャアが「ニュータイプ」なのだが、彼等は勘が鋭かったり、反応が早かったりして、戦闘に滅法強い。しかし彼らの最大の特徴は「共感能力」に秀でているということだった。にもかかわらず、共感能力に秀でている者同士が、「モビルスーツ」という戦闘用ロボットに乗って死闘を展開するというのが『機動戦士ガンダム』だった。

「ニュータイプ」は宇宙空間という新しい環境のなかで生まれた新しい人類であるということだったが、現在の私たちも似たようなものである。新しい環境のなかで人はどのような変わるのか。勘が鈍くなったり、共感能力が向上したりすればいいが、その逆ではないという保証はない。もつとも、勘が鋭くなることや共感能力が向上することがよいことであるとも言切れない。

なぜ突然『ガンダム』を持ち出したかと言うと、アニメ作品はその時代の心性を反映、むしろ先取りしているように思えるからである。『ガンダム』の「ニュータイプ」はもちろん現実には見られなかったわけだが、新しいタイプの出現を予告したという点においては、結果的にはあるが的を射ていた。実は私は『機動戦士ガンダム』の原作を読んで、「宇宙空間という新しい環境のなかで人類は生まれ変わる」という意味の記述に感動したのだった。

最近のアニメでは『新世紀エヴァンゲリオン』である。私がこの作品に注目したのは、それが時代を映し出し、ある部分先取りしていると感じたからである。親子、特に主人公シンジと父ゲンドウ



の関係の描き方には見るべきものがあつたと思う。また、副主人公アスカとその母親のことも伏線として重要な意味を持ち、「汎用人型決戦兵器」である「エヴァ」が彼ら「チルドレン」の母なる存在であつたという結末は、ありきたりであつたとは言え、現代の重要な問題である親子関係をテーマとして持っていたという意味で、注目に値するものだったと思う。また、クライマックスによく出てきた「エヴァ」の「暴走」やシンジの「逆切れ」は、現代の親と子の心性を象徴しているように私には思えた。

すなわち現代社会においては、親も子も「よき親」「よい子」であることを求められ、互いに自らの感情や欲動を抑えていかなければならない。しかし今や、内なる欲動は強くなり、その一方で抑圧は過剰になり、ちよつとしたきっかけで暴走する危険性ははらんでいる。『エヴァンゲリオン』はそのことを暗示していたように私には思える。

抑圧が続く限り、暴走は避けられないだろう。抑圧を取り去つたコミュニケーションが可能なのかどうかかわからないが、試みることはできると思う。

(学習院大学)